

# 東京都市大学における女性研究者支援の取り組み②

## 「プラス1プロジェクト」と「広がれ！理工大プロジェクト」のねらうと成果

東京都市大学准教授・女性研究者支援室長 小川 順子

### ■女性研究者ゼロの学科をゼロに！が言葉

「プラス1プロジェクト」は、文字通り工学系学部（工学部・知識工学部）の二二学科の中で女性研究者がゼロの学科にプラス1の女性研究者を入れることを目的としたプロジェクトです。二〇〇九年に本学が「工学系イノベーション」の男女共同参画モデル」事業に着手した時に、二二学科のうち実に七学科が、女性研究者ゼロという実情でした。本学上層部としてもこうした実態への問題意識は高く、このプロジェクトについては、大学独自の予算で三名の教育講師という立場の女性研究者を採用する、という意欲的な取り組みを全教員に示しました。

教員の採用は、通常、学長・事務局長・学部長などから成る専門分野編成審査委員会が決定しますが、このプロジェクトについては、女性研究者支援室が、学科選定までのプロセスの中で、各学科への募集、応募学科の取り

まとめとヒアリング、選定についての評価作成などに関わり、どの学科に採用したら、この事業の理念により合致するかを参考意見として述べる事ができる立場を与えられました。

このことが結果的に、女性研究者が少ない学科と女性研究者支援室との相互理解を促進し、自然な形で学内の、事業への認識を高めたと思われまます。全学に事業の重要性を理解してもらおうには、このように、上層部がバックアップしていることが教職員に見えること、またそのための独自の予算が付加されているという教職員へのインセンティブが大変重要だと思えます。

もう一つのアイデアは、応募学科へのヒアリングで、採用される女性研究者を各学科がどのように位置づけているか、特に将来的に恒久的な人材として対応していく意欲があるか、という点に焦点を当てました（囲みのインタビュー内容を参照）。特に、ヒアリングに応じてくださった主任教授の先生方と、そ

### プラス1プロジェクト・教育講師採用インタビュー内容

- 1 女性活用の社会的背景への理解
- 2 大学において女性活性化の重要性を認識
- 3 女性講師活用方針
- 4 継続的に採用する考え
- 5 理工系の科目への女性教員の投入か（語学・一般教養ではなく）
- 6 女性受け入れについての環境整備
- 7 女子学生対応の課題があるか
- 8 学科として女子受験生数向上への意識
- 9 この申請にかかわらず、自発的に女性を採用する計画の有無
- 10 女性教員の理想的な割合についての考え
- 11 教育講師としての具体的な候補者がいるか

それぞれの項目について意見を交わしながら、女性研究者支援室が目指していることが伝わるように心を砕きました。

こうして、本格的な事業開始から半年を経て、二〇一〇年度スタート時には、計画通り三名の女性研究者が採用され、女性研究者ゼロの学科は、四学科に減少しました。

また、こうした女性研究者採用の動きは、思わぬ波及効果を生み出しました。工学系で新採用される研究者に、目立って女性が増えてきたのです。初年度は、上記の取り組みがあり、その後は、様々な行事で女性の採用促進をお願いすることに留意してきました。そうした地道なアピールが効を奏した面もあり、学内における女性研究者の採用は二〇一一年を迎えるまでに、計八名を数え、工学系学部における女性研究者の割合は、二〇〇九年度の六・三％から二〇一一年度スタート時には、一一・四％に増加しました。

残された課題は、いまだ女性研究者ゼロの学科が三つあることです。また女性研究者の割合が増えたといっても、一〇％には届かず、客観的に見れば、まだまだの低い位置に留まっています。さらに女性研究者のみならず、女子学生の割合にも課題があります。例えば建築工学科や生体医工学科などの学科は二〇％前後と増えているのですが、機械工学科や情報ネットワーク工学科は五％前後に留まっているので、こうした偏重している点も改善したいと思っています。

### ■理工大のネットワークを存分に活用

二〇〇九年十月、事業の本格始動を盛り上

げるために都内でキックオフシンポジウムを行いました。学内外から二〇〇名以上の参加者を得て、洋々と船出をしました。そのシンポジウムでは、東京農工大学、室蘭工業大学、芝浦工業大学、東京電機大学の四大学から、男女共同参画に関心の高い副学長、教授クラスの前先生方がパネリストとして、登壇してくださいました。ここに「広がれ！理工系大プロジェクト」の出発点があります。

東京農工大学は、すでに同じ事業の先進大学として、キャリアパスでのメンター制度、学内研究サポートシステム、卒業生ネットワークシステムなど、学ぶべき取り組みをたくさん行っている大学で、本学の目標でもありました。一方、本学を始め、他のパネリストの方々からは、まだ学内の取り組みは進んでいないという実情が報告されました。このプロジェクトは、活動の芽はあっても、全学的な広がりには程遠いという工学系を中心として成り立っている大学が、情報を共有し合って女性研究者に門戸を開き、育成し、大学の発展に通じる男女のバランスのとれた研究環境構築を目指すプロジェクトです。

このプロジェクトに本格着手したのは、二〇一〇年夏からでした。室蘭工業大学（以下、室工大）は、水素エネルギー研究で連携を組んでいる大学ですが、室工大の課題の一つは、女性研究者が国立大学の中で最も少ないという状況から脱するということでした。そこで、私たちの一年あまりの経験を少しでも役に立

ていただければということと、継続的に情報交換を行いました。はじめに、関係する教職員どうしの準備会議、次に本学からの室工大の教職員の方々への「工学系イノベーション」の男女共同参画モデル・東京都市大学からの報告」と題した講演と意見交換会をさせていただきました。三回目の訪問では、学生向けに男女共同参画社会とキャリアパスについての授業をしました。こうした交流の中で、室工大も積極的に課題に取り組み、組織として正式に男女共同参画室を立ち上げるに至りました。広がれ理工大プロジェクトで、私たちがさらに力を入れていかなければならないのは、首都圏における多くの工学系大学での問題意識の高揚です。この課題についてのアプローチとして、私工大懇話会部課長連絡協議会の開催時に、本学の男女共同参画への取り組みについてプレゼンテーションをさせていただくことになりました。この私工大懇話会は、私立の理工系大学のうち、首都圏の一四大学が大学運営、諸事務に関する意見交換、情報収集を目的に組織されたものです。さらに各加盟大学を会場として、定期的に開催し、設定されたテーマに応じて、関係する職員が参加しています。これにより、共通テーマとして取り上げられれば、それぞれの大学にとって、女性研究者支援や男女共同参画について、より良い方向に進むのではないかと期待しています。

今回は、「科学とともだちプロジェクト」ロールモデル発掘プロジェクトを紹介いたします。◀